



Title	「私たちはひとつ」
Author(s)	栗本, 英世
Citation	未来共生学. 2014, 1, p. 394-399
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51748">https://doi.org/10.18910/51748</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「私たちはひとつ」

栗本 英世

大阪大学大学院人間科学研究科教授

「共生」という日本語は英語にどう訳すのかという問題が、未来共生イノベーター博士課程プログラムの内部で議論されている。未来共生プログラムで構想されている「共生」とぴったり重なる英語の概念がみあたらないため、これはやっかいな問題だ。すぐに思い浮かぶのは、生物学の用語としてのsymbiosis（共生、共棲）や、一般的に共存を意味するco-existenceである。公式ホームページに記載されているプログラムの英訳では、multicultural innovation（多文化革新、多文化創生）となっている。これはプログラムの内容と目的をくみ取った、いわば意識である。また、いっそのこと無理な英訳はせずに、ローマ字表記したkyoseiを採用しようという意見もあった。本誌『未来共生学』の英訳が、*Mirai Kyosei: The Journal of Multicultural Innovation*となっているのはこうした経緯による。これには、日本語のkyoseiという概念を世界に広めていこうという意気込みがこめられている（この問題については、本誌巻頭特集の志水宏吉による論考「未来共生学の構築に向けて」を参照のこと）。

私たちが考えるべきなのは、一方で未来共生プログラムの内部で使用されている「共生」の意味内容であり、他方でこの日本語の概念が、英語だけでなく世界のさまざまな言語にいかにかに翻訳可能なのかという問題である。この問題を考えること自体が、未来共生プログラムの発展と深化につながると思われる。

私は人類学者なので、こうした「概念の翻訳」の問題をつねに考えている。人類学者の仕事は、それぞれの社会や文化で重要な意味を担っている固有の概念をいかに翻訳するかに尽きるといってもよいほどである。ちょっと以前なら、日本語の「恥」「恩」「義理と人情」「ほんねとたてまえ」「親分と子分」などを日本語以外の言語にちゃんと翻訳することは、そのまま日本の社会と文化のある重要な側面を理解することにつながっていただろう。現代なら、「オタク」「ひきこもり」「かわいい」「うざい」といった概念になるのだろうか。

私の場合、相互の翻訳を考えるときに対象にするのは、日本語、英語およびパリ語の3言語である。パリ（Pari）は、私が30数年間付き合ってきた南スーダン・東エクアトリア州に居住する民族集団の名前で、パリ語を母語とする。パリ語を母語とする人びとの数は、4万人程度であるから、少数言語であるといってよい。この言語は、言語学上の分類では、ナイル・サハラ大語族のチャリ・ナイル語族、東スーダン語派のナイル語群に属している。近縁の言語は、北東・東アフリカ一帯で広く話されている。

さて、パリ語には「共生」に相当する語彙は存在するのだろうか。いろいろ考えてみたが、類似した名詞は思い浮かばない。あるとしたら、名詞ではなく「私たちはひとつである」(*on-a-chielo*)という文章である。*achielo*は数詞の〈1〉であり、文脈によって「おなじ」「いっしょ」などと訳すことができる。*on*は、1人称代名詞の複数形、つまり〈私たち〉を意味する。ここで重要なのは、パリ語の1人称代名詞複数形には、包括形(inclusive)と除外形(exclusive)の2種類があり、*on*は包括形であるということだ。除外形の1人称代名詞複数形は*wan*である。

1人称代名詞複数形の包括形と除外形のどちらを使用するのは、話者と聞き手の関係によって規定される。この問題は、日本語を母語とする者には理解しにくいと思われるので、具体例をあげて説明しよう。ここに、私とA、B、Cの三人がいっしょにいるとする。Bが私に向かって「私たちはそろそろ行きます」と言ったとしよう。この「私たち」が包括形の場合は、Bと私の両方が含まれるが、除外形

の場合は「私たち」には私は含まれず、Bと他の人（あるいは人びと）を指す。また、もしBが、その場にいる全員、つまりA、Cと私に向かって包括形を用いて「私たちはそろそろ行きます」と言った場合、この「私たち」には全員が含まれている。

包括形と除外形の1人称代名詞複数形は、使いがてのよい便利な道具であるが、話者の発言をちゃんと理解するには、話者が置かれている状況と文脈に対する感受性が必要である。つまり、話者にとっての「私たち」がだれかを的確に理解していなければならない。そして、「私たち」は状況と文脈に依存してつねに変化する。

生まれながらのパリ語の話者にはありえないことだが、学習中の者には、包括形と除外形にかんする理解が不足しているために、笑えない悲喜劇が生じることがある。たとえば、除外形を用いて「私たちはこれから飲みに行く」という発話があったときに、私たちから除外されている人が、自分も「私たち」に含まれていると誤解していっしょについていってしまうことがありえる。パリ人にとっての飲食はコミユナルな性格がつよく、酒席に他者が来訪した場合は、「いっしょに飲みましょう」と誘うのが当然であるので、誤解してついて来た人に、「あなたは呼ばれてないよ」と公言することはまずない。しかし、「あいつは空気が読めないやつだ」と思われることはたしかだろう。

さて、パリ語において「共生」に相当する「私たちはひとつである」(*on-a-chielo*)という言語表現で用いられる「私たち」は包括形である。この表現は特殊なものではなく、日常的によく耳にする。パリの人たちは老若男女にかかわらず、人前で話すことを好む。人びとが集まる場で、つまりコミユナルでパブリックな場で話すことに小さいときから慣れているのである。社会における基礎的な集団として、出自集団 (*tung*)と年齢集団 (*lange*)がある。出自集団は、共通の祖先の父系の子孫たちから構成される、人類学ではクランやリネージと呼ばれる集団であり、年齢集団とは同じ集落の同年齢の人びとから構成される集団である。同年齢の幅は3、4歳であり、通常ひと

つの集落の年齢集団は数十名のメンバーから構成されている。出自集団や年齢集団のメンバーが集まっていっしょに酒を飲んでいる場面を想定してみよう。こうした機会はしばしばある。人びとはわいわいがやがやと歓談しているのだが、突然、ある人が立ちあがって話し始めることがある。ここでその場はインフォーマルな歓談からフォーマルな演説の場へと転換し、人びとは歓談をぴたっとやめて話に耳を傾ける。だれがどういう順番で話すべきかというルールは、集団のなかで共有されており、数名が次々と話す。話題は、その集団、あるいは集落、さらにはパリ人全体が直面しているさまざまな問題である。こうしたいわば「阿吽の呼吸」で実践される語りは、じつに見事なものであって、身体化された「生きられた文化」をまざまざと実感することができる。私はこうした場面を数え切れないほど経験してきた。近年は、私自身がこうした機会に皆の前で話すこともおおい。年齢を重ねて、そうした役割を当然期待される立場になったということである。

「私たちはひとつである」という表現は、こうした場の常套文句である。そこでの「私たち」は状況と文脈に依存する、伸縮自在な概念であって、パリ社会の分節に対応して、年齢集団や出自集団から集落、そしてパリ全体などを意味する。パリには、六つあるすべての集落のメンバーが参加して、社会全体の安寧や豊穰を祈願する儀礼がある。そこで「私たちはひとつである」という表現が多用されることは言うまでもない。

皮肉で分析的な見方をすれば、つねに「私たちはひとつである」と強調しなければならない状態とは、実際には「私たちはひとつではない」状態を反映しているのではないだろうか。私が理解するかぎり、これは事実であって、人口数万人のいかに小規模な社会といえども、その内部には社会を構成するさまざまなレベルの集団間のあつれきや紛争が存在する。この紛争はときに暴力的な形態をとり、私はこのことを長年の研究テーマとしてきた。

この紛争の問題は、パリ社会内部の「私たち」がいかに想像されて

いるのかという問題であると言い換えることができる。それは状況と文脈に応じて伸縮する。では、理論的におよび現実的にどこまで伸びることができるのだろうか。言い換えれば、パリの人びとにとって、民族社会を超えた「私たち」はいかに想像可能なのだろうか。

私が1978年にはじめてパリ人と出会ったとき、この人たちはスーダンという国家のなかの、南部スーダンと呼ばれる地方の住民であった。しかし当時、自分たちが「スーダン人」「スーダン国民」であるという意識はきわめて薄かった。つまり、彼／彼女たちが言う「私たち」がスーダン人を想定していることはなかったと言ってよい。その後、1983年に勃発した内戦はパリ人の運命をおおきく変えていくことになった。多数のパリ人が、反政府の解放戦線に参加するため、あるいは戦乱から逃れるため、主として徒歩で長距離を移動してエチオピア、ケニア、ウガンダに行った。このとき、人びとははじめて「国境」というものの存在を実感したのだった。こうした移動は、それまで日常的に接触することのなかった他民族や隣国の人びとと出会う機会を提供した。また、複雑で錯綜した展開をたどった内戦の状況下で、パリ人自身も、政府側と反政府側、解放戦線の主流派と反主流派という敵／味方のラインに沿って分断されていくことになった。こうした変化は、「私たち」の想像のされ方におおきな影響を与えたと考えられる。

スーダン内戦は2005年に終結し、2011年には南部スーダンは南スーダン共和国として独立し、パリ人はこの世界でもっともあたらしい主権国家の国民となった。しかし、私の知る限り、南スーダン人全体を意味する「私たち」は、パリ語の日常会話における常套文句とはなっていない。あるいは、戦後の復興と平和構築の大事業の遂行のために南スーダンに來訪した国連や国際NGOの職員たちを含めた、さらには、戦後復興景気をあてこんで周辺諸国から流入してきた商人や起業家たちを含めた「私たち」というパリ語の発話を聞いたことはない。こうした人びとは「私たち」とはことなる「他者」であり続けている。

パリ語という、世界中で数万人しか話していない少数言語における「私たち」の用法についてながながと述べてきたのは、第一に「共生」の問題は多言語で思考する必要があることを強調したいからであった。第二に、「共生」とはつまるところ、さまざまな境界を越えた「私たちはひとつ」という意識にもとづくのではないかと考えるからである。この意識がなければ「共生」はありえない。現在の南スーダンでは、これは戦争か平和か、死か生かという問題と深くかかわっている。日本ではそれほどの切実さはないが、「私たちはひとつ」という意識は、「共生」の問題を考えるうえで決定的な重要性を担っているだろう。日本語を母語とする人たちが、さまざまな日常的場面で「私たち」をどう想像しているのか、世界のさまざまな言語で「私たち」はどう想像されているのか、そしてそこで「私たち」から除外されているのはだれなのか、それぞれの状況と文脈に留意しつつ詳細に検討していく必要がある。この検討の営為は、私たちにおおきのことを教えてくれるはずである。